

余の奄美十島に視たる宗教

東京帝大助教授
文學博士

宇野圓空

予の講題は奄美十島に關してゐるが、實は素通り式の見聞を述べる迄であつて、研究の性質を帯びたものでない。周知の通り奄美十島中の首島は今鹿兒島縣大島郡に屬してゐる奄美大島で、それから南方へ琉球方面に向つて、可なり大きな範圍の海面に喜界・佳計呂麻・徳之島・冲永良部等の島々があり、又、大島から手前、薩摩國の佐多岬にかけては所謂寶列島が排列されてゐる。予が昭和九年の五月に行つたのは、主として此の寶列島である。タカラは普通に「寶」の字で表現されてゐるが、古くは土噺喇・度加喇・吐火羅・靚貨邏等種々の文字を假り用ゐたもので、その結果中央亞細亞のトカラと混同されたものらしく、孝徳紀にも「白雉五年夏四月、吐火羅國男二人女二人、舍衛國女一人、被風流來于日向」と云ふ類の記事が見られる。當時の中央政府では南島の知識が十分で無かつた爲であらう。寶列島

は全部で十島ある。北から順次に算へると、竹島・硫黄島・黒島と横に列んで在る三島が所謂「口三島」で、それより稍南方に離れて、口之島・中之島・臥蛇島・平島・諏訪瀬島・悪石島・寶島と所謂「沖七島」が散布してゐる。曾ては之を川邊十島とも稱したが、今は奄美十島の名で呼ばれ、行政上は十島村と成つてゐる。川邊の稱を冠したのは、明治二十九年に是等の島々が大島郡に編入される以前、川邊郡の所管だつたからであるが、舊藩時代は口七島と沖七島とは別々の關係で、即ち七島だけが固有の寶島である。勿論七島とは云つても、臥蛇島以外別に小臥蛇島があり、寶島も亦大寶・小寶と別れてゐて、大小を合せると九島になるが、小臥蛇島・小寶島は何れも附島に過ぎない。斯ういふ有様で、要するに十島何れも火山島の繋がりであるから、島としては大したものではないが、而もそれが、どうして中央方面の人々に興味を感じさせたのかと云ふと、古來交通不便で寄航者が少く、隨つて其處には古いものが残つてゐるであらうと想像される事、及びその特殊な風習が幾分誇張されて傳はつてゐる事などが原因のやうである。多分ベルツであつたらうか、奄美島人はアイヌと同人種であると云つたので、島民の激怒を買つた事がある。これは餘りに内陸から遠く隔絶した海上にある爲に、さうした想像も生れて出るのであるが、確に外國でも異國でもなく、住民は皆純眞の日本人であつて、奄美大島の傳説に據ると、筑紫に降臨された天孫系の一分子が更に南進して開かれたのが奄美の島々であるとさへ云はれてゐる。

る。果して本土から南進したのか、或は反對に南方から來た部族が日本本土へ移動する途中で取殘したのか、そこまでは容易に断定出來ないが、とにかく我が日本の古代史上に、内陸との交通を傳へてゐるのは明白な事實である。便宜上予は、大島の中學校で、日本紀・續日本紀等古文獻からの引證文を一覽させて貰つたが、それに従ふと、先づ推古紀には、「掖玖人二口、流來伊豆島」とあり、次いで舒明紀元年の條には「遣田部連於掖玖」とあるのが今の屋久島であつて、これは奄美十島の東北、本土に近く寄つて、種子島・口永良部島などと列んでゐる島である。寶島即ち昔の觀貨邏島へ内地から行つたと云ふ歴史的記述は無いやうであるが、齊明記の三年秋七月の條には、「觀貨邏國男二人女四人、漂泊于筑紫言、臣等初漂泊于海見島云々」とある。此の觀貨邏が今の寶島であるか、或は中央亞細亞のトカラであるかは歴史的研究所を要することと思ふが、とにかく古く齊明天皇の御代に於て海見島即ち今日の奄美列島方面から漂流者があつた事は右の記載によつて明瞭である。次いで天武天皇の御宇十一年に至ると、阿麻彌人が、多禰人・掖玖人等と共に來貢して各祿を賜はつたとあり、續いて文武天皇・元明天皇の御代にも朝貢の事實を傳へてゐるが、平安朝初期以後歴史上には其名を没して、専ら傳説中のものとなつた。中世の傳説は専ら鬼界島について語られてゐる。一つは源爲朝の物語、他の一つは俊寛僧都島流しの物語である。

同じくキカイを名に冠するもので、喜界島と云ふのが、奄美大島の東にあるが、鬼界と書く方のキカイが島は、平家物語に「昔は鬼の住ければ、鬼界島とも名付たり、今も硫黄の多ければ、硫黄島とぞ申ける」とある通り、奄美十島中の口三島に屬する硫黄島の事である。今も此の島内には、俊寛僧都の住居跡とか、その遺靈を祭つたらしい所とか、残つてゐる外、甚だしいのは俊寛僧都足摺岩と云ふやうな物もあつて、眞面目に信ぜられてゐる。とにかく昔から是等の島々には、俊寛・康頼式の配流者もあつたらうし、又漂着者もあつて、それ等が傳へ渡した虚實さまざまの話が、後世には一層輪をかけて語り繼がれた事と思はれるが、例の全國的に著名な平氏の落胤傳説は、殊に十島に亘つて一般的である。平家が其一門を盡して壇浦に没落した際、重盛の子の資盛・有盛・行盛の三人は、潜に遁れて鬼界島に至り、更に進んで奄美大島に轉じ、遂に之を占領して各分領し、子々孫々相傳へて七島に支配權を揮つたと云ふ話の如きは其の一例であつて、一層猛烈なのは、壇浦の海戦後、平氏の一門は安徳天皇を奉じて硫黄島に上陸し、其處に黒木の御所を造つて云々との話である。『三所權現宮鎮座本紀』には、御所が全部硫黄で出来てゐて、安徳天皇は其處に寛元々年まで御存命であつたと、殆ど小説に近い記事を載せてゐる。此の種の傳説が何處まで信ぜられるかは疑問であるが、現に硫黄島には、陵とも申すべきものを初め、女御たちを葬つたと傳へる墓の類が約二三十、半ば土に埋もれて、纏まつた陵墓群を形成して

ゐる外、奄美十島の殆ど全部にかけて、平氏の後胤と自ら確信し、系圖などをも持ち傳へてゐる家が、今も名家として残り、要職に就いてゐる。

是等の奄美十島が、古く何處の支配に屬してゐたかと云ふ的確な事實は判明しないが、奄美大島が琉球に附屬してゐた時代は相當長いやうであるし、又北方の三島は寧ろ薩摩との關係が深かつたらしい。島津家の歴史に據ると、島津氏が日向・大隅・薩摩三州の守護となると同時に、南海諸島の地頭をも兼併したと云ふ事であるが、その支配權の及んだ範圍は判明しない。但し島津家久が、慶長十四年征南の軍を進めた時には、先づ奄美大島を占領して、他の諸島に及んだらしく、爾來治所を大島の名瀬に置いて、明治維新に至るまで之を統治した。

二

以上は奄美十島の概觀を申述べたのであるが、何故に南方の奄美大島とか琉球諸島とかへ手が伸ばされ乍ら、中間の十島が殆ど抛擲されてゐたのかと云ふと、それは風浪の險惡な事が理由を成してゐる。大島郡の中心たる名瀬の測候所で聽くと、十島附近は颱風の製造所と云つても可い所で、晴天の日は一年間に約一ヶ月程しかなく、硫黄島・諏訪瀬島・寶島等は今なほ噴火してゐる上に、風があるので寄り附けない。殊に、又猛烈に恐ろしいのは黒潮で、素人目にも恐ろしい位に危険である。即ち斯うした交

通上の不便が、十島を時代の文化から取残させたのであつて、其爲に古來僅に流人とか、漂流者・落人と云ふやうな者たちに依つて、本土との聯繫を細々と續けるに過ぎない状態にあつた事は前述の如くである。併し斯の如き關係は十島人の生活を特殊なものにした。中央からは遠く懸け離れた存在であつたにも關らず、都からの流人・落人などを受け容れたが爲に、現に見る十島人の生活は甚だ原始的なものであり乍ら、妙な處に上方文化に似たものを遺し傳へてゐる。其の片影は器具などにも見られるが、とにかく住民の中には、平氏の後裔たる事を信じて、尤らしい名をつけ、家の系圖を誇つて者が多いと云ふ事が、手近い薩摩の影響を通り越して、遠く上方文化との關係を作らせてゐる。随つて一口に言ふと、十島には木に竹を接いだやうに高い文化と低い文化とが混在してゐる。此の事は十島の宗教を了解する上からも注目すべき點であるやうに思ふ。

第一に家屋を見ると、堀立柱に竹網代の壁と云ふ鳥籠式の簡單なものであるが、着物の方は、それと不似合な京風の昔小袖が一部分に行はれてゐる。生業は海島としての本性上、一般に漁業であるが、近海では近代式の鱈漁船が活潑に動いてゐる中で、島民たちは諏訪瀬島を中心に、昔乍らの奇妙な刳木式の舟を操つて出て、舊式の漁をしてゐる。それは一見平たい形に見える原始的な舟である。又、陸上では勿論農作もしてゐるが、水田は比較的少く、作物としては古來粟が主たる物で、それが宗教的儀禮に

も出て来る。粟の外には唐芋即ち里芋を作つて、それを色々に工夫して食べてゐる。私も里芋を芋羹式に練上げて油揚げにしたものを貰つて、珍しいと思つて食べたが、あれが年中の常食では堪らない。しかし土地の面積の狭い所では他に方法もないのであらう。斯う云ふ風に十島では萬事が新舊高低入り交つた文化状態であるが、中には折角いゝものを取り入れ乍ら變な風に退化させて了つた跡も見られる。例へば硫黄島で行はれてゐる踊の歌詞などを見ても、「げに名も高し敷島の神の祈の」と云ふ風に優雅な大和詞で出てゐ乍ら、段々進むと、殆ど詞にもなつてゐない不思議な文句が現れて、全體を打ち壊してゐる。詞句中には熊野とか大和・伊勢などの道行が見えるし、題にも「花の大阪」など云ふのが在る所から見ると、上方からの輸入であるらしいが、それを地方化して段々歌ひ崩したが爲に、歌詞としても、又、調子としてもエタイの知れない繼ぎはぎの物に成つて了つたのである。

土地の所有權などもまだ本當には定まつてゐない。併しそれでは原始共產制かと云ふと、それ程でもない。既に私有の繩張は出来てゐるが、まだ登録される運びにはならず、今日では先づ部落有と云ふ所で、田畑は勿論宅地も皆さうである。だから十島では何處でも自分の好む所に自由に家を建てる事が出来る。これは古來の儘の姿であるのか、或は退歩したのか不明であるが、確に妙な形である。村役場は中之島にある。村長は近代的な人で、村民の教化向上に頗る盡力されてゐるが、此の人が本土との交

通路を開くため、昭和八年に百五十噸のモダンな鐵船を造り、中央から低利資金を借り出して村營で交通運輸に従事してゐる。其の他には無線電信の設備も出來て、通信路も十分に開かれてゐるが、此の通りに凡てが皆部落本位、島本位に出來てゐる。各部落にはそれぞれ區長があるが、その外に島では、古來重立つた家の人々が寄り集まつて事を決した舊慣が今も残つてゐて、何か重要な決議事項がある場合には、多くの顔役の中から人民總代が選み出されて、それが區長と相談して決定する事になつてゐる。即ちこゝにも、近代化せんとして十分に近代化しきれず、さればと云つて古いままでもないと云ふ過渡的な混淆状態が見られるのである。

次に人口は、我が日本一般の状態から觀ると、當然此の島でも漸増せねばならぬ筈であるが、衛生設備が十分でないと同時に、大阪方面への出稼ぎが多い爲に、少しも増加してゐない。島では男女共に相當の年齢に達すると、盛に職工に出て行つて、二三年も都會生活をしてゐるうちには、島へ還る氣もなくなつて其の儘留まるのだと云ふ。そんなわけで、島には若者が少く、祖先の地に踏み留まつてゐる二十歳乃至二十五歳以上の人々には、比較的無學文盲が多い。小學校制度も昭和四年になつて漸く初めて施行されたと云ふ有様で、隨つて校舎なども掘立小屋式のひどいものである。教員も僅に一人で全校を教へてゐる現狀であるから、その努力に對して十分の効果を擧げることが出來ないでゐる。勿論將來は

大いに進歩發達をする事と思ふが、今迄の所では、相當高い文化を受け入れる機會に恵まれても、十分に之を消化し盡す力がない爲に、自然上下兩級の文化が様々に交錯して存在する状態を現してゐるのである。そして我々は、十島の宗教状態を考へる場合に於て一層その感を深くする。

三

前述の次第で、現在の奄美十島には、恰もサムブルを列べたやうに、我が日本に於ける上級から下級までの一切の宗教状態が、悉く現し出されてゐる。

先づ佛教から觸れる事とするが、これは相當に移入されてゐる。時代は不明であるが、最も早く入つたのは眞言系のものである。或は廣く密教と言つた方が可いかも知れないが、それも台密か東密かは分らない。とにかく十島の一つである平島には、福壽院といふ寺の址が残つてゐる。大きな柱を直接掘立にして、周圍を竹網代で廻らした稍大きいスケールのものであるが、荒れ果て、床もない。其處に二體程取残されてゐるのは大日如來の尊像である。傳説では平家の落武者の二代目が建てた寺であると云ふが、實證はない。位牌も一二残存してゐるが、それは元祿時代の物である。次に此の平島には又墓が多く、島民はそれを一種の誇にさへしてゐるのであるが、それが多くは皆近代的スタイルではなく、五輪塔形式の物で、碑面には何々阿闍梨と僧名が相當多く刻み込まれてゐる。とにかく密教關係の人の墓で

ある事は明瞭である。年號の判明してゐるのには古い物がないが、若し平家の落武者の二三代目の者が建立したと云ふ傳へが眞實ならば、或は鎌倉時代まで遡れるかも知れない。なほ平島の南方、寶島には、藥師如來、不動尊等を祭つた所がある。これも佛像から考へて、古く密教系の佛教が入つた事を示すものであるが、いつ頃に擴まつたものか、其の踪跡を突きとめようとするよすがもない。次に口之島には天徳山潮音禪寺と云ふ臨濟禪の寺がある。これも福壽院に劣らぬ荒廢に陥つてゐるが、時々村民が來て修理をして行くと云ふ事で、とにかく家屋の姿を留めてゐる。なほ惡石島にも臨濟系のものらしい養徳寺と云ふのがあるが、斯ういふ風に、臨濟禪の寺が残つてゐるのは、曾て其の宗の佛教が薩藩に勢力を占めてゐた結果らしい。

以上の事實で察せられるやうに、十島の佛教は、碑面の戒名から考へて眞言系のものが最も古く、之に次いで臨濟禪であるが、更に今少し下ると淨土宗の入つて來てゐる形跡がある。硫黄島には寺がないが、島人の宗旨は全部淨土宗だと云ふ事で、死人があると集まつて念佛をするさうである。誰が持込んだのかは不明であるが、袋中上人の琉球宣教の事例もあるやうに、遍路の道すがら十島方面に赴いて教化を施し念佛を勧めて行つた人が遺した種であらう。次に十島中で目立つて新しいのは眞宗の墓である。殊に明治二十年三十年以後の物に俄然立派なのがあつて、戒名は明らかに眞宗式である。是等の碑

石は皆本土の薩摩から取寄せたものであつて、何れも正式な墓の形を成し、碑面には何年何月何日往生と判然たるデータが刻まれてゐる。此の宗旨は藩政時代に薩摩で嚴禁されたもので、相當強い迫害を受け、長い間祕密宣傳をしてゐたのであるが、明治維新後解禁と共に本願寺が手を着け、遂に勢力を占めたのである。そこで明治中期以後は、鹿兒島・宮崎方面で寧ろ反動的に眞宗が強盛になつた。十島に眞宗が伸びたのは其の餘勢であるらしい。これは竹島での例であるが、私が其の島へ上つて、昔大寺があつたと云ふ所へ行つて見ると、其の跡に凡そ百人程入れる公會堂が出来てゐて、篠竹で出来た簀子數の床の正面にある佛壇には阿彌陀如來が祭られ、佛飯も供へられてゐた。一見して眞宗式である事が分つたが、其の公會堂の世話をしてゐる人が自宅へ來いと云ふので導かれてゆくと、其の人は叔父が鹿兒島で眞宗の教を受けて念佛を勧められ、一冊の經本を持つて歸つたので、その本を自分が受け繼いで、昔の寺の跡へ公會堂を建て、奉仕的に勤をしてゐるのであると話した。勿論勤めとは云つても、勿論僧侶ではないのであるから、死者があつた場合、只葬式をするばかりで、その外は盂蘭盆に一晚中念佛をすると云ふだけのものであるが、とにかく此の話によつても、十島の佛教では眞宗が最も新しいものである事がわかると思ふ。

斯う云ふ次第で、十島の佛教は流人とか落人とか云ふ類の人たちが土着して、斷續的に教化して來た

ものらしいが、その宗旨が信ぜられたのは寺のガツチリしてゐる間だけで、凡てに於て生活が窮迫してゐる孤島では、到底長く寺の經營を維持し通すことが出来ないため、次第に建物は荒廢し、住僧も居なくなつて、今では、眞言も念佛も分らなくなつて了つてゐる。現に十島で寺の名が残つてゐるのは、僅に三四ヶ寺しかなく、佛教は名のみであると云つていい。しかし曾ては十島に斯うした諸宗が入込んでゐたと云ふ事は認めねばならぬ。

次に神社の方はどうかと見ると、其多くは八幡社である。内地でも八幡を冠稱する社が甚だ多くあつて、果してそれが皆固有の祭神であるかどうか疑問を挾まれるのであるか、とにかく口之島・中之島・臥蛇島・悪石島などにも通じて、奄美の大抵の島々には八幡社がある。これ等は或は、何の時に佛教と相伴つて入つて來たのではあるまいかと考へる。なほ神道方面で見のがせないのは、今も權現號を用ゐてゐる事で、これは曾て熊野信仰が優勢だつた餘波らしく、例の硫黄島の踊の謠の中にも、「三の御山」とか「熊野」とかの名が到る所に出てゐる。殊に康頼判官等祈請の説話を傳へる硫黄島には、今なほ熊野權現を祭る社があつて、現に硫黄權現と呼ばれてゐる。元は熊野神だけの祭祀であつたのを、後年安徳天皇を祭祀し奉つて現稱に改めたのだと云ふ事で、社側には別に小祠があつた。その上又、更に驚いたのは、色々寶物類を陳列して見せられた中に、繪卷物にしては少し幅の廣過ぎる横長の一巻があつ

て、島での最貴重の寶物であると云ふので見せて貰つた處、それは絹地に書いた熊野曼陀羅で、熊野の諸眷屬・八王子などをも配置し、本地を阿彌陀如來と立てた相當古いものであつた一事である。時代は勿論判明しないが、斯うした熊野信仰が古來存した所を見ると、平家の落武者物語も漫に否定は出來ないのでないかとも思はれる。熊野の外には藏王權現もある。これは元來金剛藏王菩薩であるが、それが神性を與へられて、藏王神社と現稱されてゐる。又之と類型的なもので、觀世音神社と云ふのが寶島にある。或は近年につけた社稱かも知れないと思ふが、とにかく誰が持込んで來たとも分らない斯うした神佛混合型の神社が、儀禮と共に十島に残されてゐるのである。それから内地の例はどうか知らぬが、竹島には蕪齋たる森の中に、拜殿様の物、並に祠様の物があつて、聖明神と呼ばれてゐる。大川と云ふ人が祠職で、これは前に述べた佛教公會堂の世話人の實兄に當るが、同じ島内で兄は神前に奉仕し、弟は佛堂を守つてゐるのは面白い對照であると思つた。其の大川兄氏に導かれて明神社に參ると、祝詞をあげて恭しく開扉したので、不圖見ると、意外にも御正體は阿彌陀佛であつた。聖明神の本地は阿彌陀如來かどうか知らないが、島ではそんな事は一切平氣で、神前には線香・蠟燭などを點し、又、金屬製の佛器に飯など盛つて供へてある。殊に巫女が神前で祈をする時には、珠數の大きいやうな物を押揉むのが一見山伏式である。我々から見ると稍奇妙であるが、しかし島の人たちは、それが神拜の法式だ

と考へてゐる。とにかく内地人のやうに、神・佛と確然別れて固執するのではなく、兩方を結びつけて考へてゐる所に特色がある。寶島では小學校に古文書を寄せ集めて見せて貰つたが、その中の儀式次第書には、祝詞や祓詞が書き載せてあつた。どうやら一寶神道系の物らしく、それと前示の熊野信仰とは歴史的に聯關がありはしまいかと思はれた。又、傳書覺と云ふものの中には神前で唱へる詞を多く集めてあつたが、其の半分は巫女の唱詞で、「神さがる云々」と云ふやうな文句で初まり、最後には明治三十一年のデートのある物も見えた。その他、神拜の詞、月次祭祝詞、竈祓等は正統のものを用ゐてゐるやうで、こゝ等で漸く神道らしいものゝ萌芽を若干認めることが出来る。併し概して言ふと、内地流の神道色は稀薄であつて、まだ聖明神時代の間状態を脱しないと云つて可いやうである。

宗派神道では流石に天理教が大小寶島に入つてゐる。大阪で働いてゐた老人が歸島して勧めたのが元だと云ふ事で、幾らか痕跡は出来てゐる。

斯う云ふ風で凡てが混淆状態であるが、引括めて云ふならば、比較的自然崇拜に近い原始信仰の俤が多く十島には留められてゐる。殊に竹島では最も尊敬されてゐるのが河神の社、即ち涌泉を神祀したものである。其處には只樋のやうな物が建つてゐるだけであるが、村での大切な日には、村人が皆集まつて来る。口之島にも此の類の場所の稍大きいのがあつて、崖下の凹んだ所が聖所とされ、其處へは皆謹

んで行く。又、硫黄島には唐土の神と云ふのがある。餘り參詣人は多くないらしいが、其の横に二枚敷の岩があつて、其れに何か供へてある。或は此岩が眞の神でないかと思つたが、確な事は分らない。道祖神らしい疑ひもあつて、どうも岩石崇拜らしい。尤も別に祠は置いてある。又小寶島には森の宮がある。只繁茂した常緑樹が神の森を形成してゐるだけで、建築物は無く、其處には拾つて來た貝殻を投げたらしいものゝ堆積と、その前に棄てられてある茶碗・徳利等の破片とが見られる。案内してくれた人に聽くと、其處で拜むのだと云ふ。明瞭に社殿のない森の宮の痕跡を今に残してゐるものである。次に口之島には非常に島人の尊敬してゐる宮がある。社殿は三つの祠から成つてゐる。八幡様ともヨリキ様とも云つて、頗る神威の森嚴な所であると云ふので、口を漱ぎ跣足になつて一步一步靜に導かれて行つたが、床のない神殿の中には、陶器の破片が散亂し、中央に一個の石があつて、赤色泥で塗られてゐる。此の石は、毎年一回、島の品行方正な獨身青年七名を撰出して、一週間の潔齋の後、赤泥を取つて塗らせる定めであるといふが、其の以外の事はわからぬ。突込んで聞く事でもないと思つたから、信仰者の話を忠實に受取つて置くだけに止めた。それから十島の殆ど全體を通じて何處にも多いのは郵社である、これは島中の聖所で、何か事があると皆此處へ集まると云ふ事である。建築物の在る所も、又、無い所もあつた。粟の收穫があつた時に、神役の者が此處で煮て、村中へ配附するのだと云ふ事から考

へると、齋場であらう。森・石・泉等の神の外には山の神の信仰もあるが、更に顯著なのは粟の神の存在である。これは粟の收穫を職能とする神と云ふよりは粟自體らしく、而も十島の人々の心を強く支配してゐる宗教の根抵的なものではないかと思はれる。

次に是等の自然崇拜に關聯して注意を要するのはシャマニスチックな巫女の存在である。これはニタ又はノロとも呼ばれ、十島を通じて多くゐるが、大島では特にネイシと稱する。勿論同じもの、別稱で、種類の違ひではないらしい。ネイシとは恐らく女の神役の意味で、上方文化の影響を受けたものかと思ふが、それに成るには男よりも女の方が一層嚴重である。口之島で聞いた所に據ると、女の神役に成るには、先づ男の神役に神宣が下つて、次に常人にも告があるのであるが、斯うして神の告見出しを受けた婦人は、必ず其の命を奉ずるのだと云ふ。一生涯の奉仕ではないが、奉仕中は殆ど獻身的である。中之島にも此の種の巫女が數人ゐて神前舞踊をするが、之を撰ぶには、やはり神宣で取るのであつて、託宣を受ける人が、神前に候補者の名簿をひろげて置き、扇子などを捧げて祈禱に入ると、思召で特定の人に當る。これに當れば必ずお請せねばならぬのであつて、斯うして巫女に成つた人は、祈禱に依つて病者を直しもする。そんな時にはやはりエクスタシーを起して顛へるが、或は顛へる體質の人がネイシになるのだとも云ふ。とにかくシャマニスチックな行事をするらしい。又お神樂もある。これは

嗶方三人に、男神役が二人（多くは座る）女ネイシが三人で行ふのであつて、女巫は何れも例の珠數様の物を首から懸け、鈴と御幣とを持つて立つて祈り、歌ひながら舞ふのであるが、其のうちに段々目つきが變つて來る。斯うして神憑状態に入るのである。口之島にヨリキ様がある事を前に述べたが、神名にもミトヨリ様とかイマヨリ様とか一々皆ヨリの字がついてゐるのは注意すべきである。又小寶島にはネイシバラと云ふ特殊のタブーされた場所があつて、其處へ來ると皆叮嚀に敬禮をする。委しい事はわからぬが、とにかく其處には代々のネイシが隠れてゐるのださうで、新にネイシに成つた者があると、法脈を引いてゐる先祖のネイシが其處から現れて來ると云はれ、祝詞にも夢物語式に「神さがる〜」と云ふ語に頻に繰返される。これもシャマニスチックな要素の一つであると云つて可からう。女の神役をネイシと稱するのに對して、男の神役は親衆と呼ばれ、一村をリードする。或はさうした名家の人が成るのかも知れない。別に又之を太夫さんともグスさんとも云ふが、内地の中古代に於ける神前奉仕者と同じく大概世襲で村の公共的な行事に就いて非常な權威を持つてゐる。斯う云ふ風に宗教がコムミュナルに行はれてゐるのは、原始的な要素の残り物とも、又、曾て入つて來た高級なもの、退歩した形とも見られるが、儀禮の上で見ると、一層その關係が判明するやうである。各島に共通した一二の例を擧げると、例へばミチゲと云ふ事がある。これは内地で云ふ十五日正月で、島では神の休日であるのであ

る。それで此の日は神が着衣を洗濯して乾されると傳へ、人が出て見ると耻かしがられるからと云つて全日籠居する事がタブーに成つてゐる。これは十島全體に通じての正月行事の重要な部分である。

又、正月前後には讚神祭又は浦祭と稱する祭事がある。これは十島の漁業祭で、戎神を呼び懸ける。あの鯛を釣つてゐる姿の戎神であつて、中之島で行ふ戎踊には、神の姿に擬して、摸造の魚を釣竿に附けた物を持つて踊るが、それが即ち戎神の讚嘆である。次に粟祭がある。これは春である。小寶島で種々の話を聞いたが、現在村人たちが考へてる以上に重要な古意のあるものらしく、六七日間にも互つて行はれる。臺灣の生蕃の間でも同じく粟祭があつて、これは特に祭の爲の酒を醸造する期間が含まれる關係上一層準備期間が長いが、兩者を比較して見ると色々面白い事があるだらうと思ふ。十島の粟祭は一村共同でもやるが、又各家別々にも執行する。特にタブーの日などもあつて、賑やかな祭ではないが、しかし嚴肅な祭事である。粟の收穫を祝ふ爲には中之島で俵踊をする。これは全く豊作を喜ぶ踊で、小さな俵を腰にブラ下げて踊るのである。今は米俵であるが、元はそれが粟だつたらしい。その他冬祭、夏祭と云ふ風に、色々珍しい行事があるが、今は只概要を申上げて、現在の奄美十島には原始的な宗教要素と後代の高級な要素とが互に入り交り纏れ合つて現れてゐる所に、海上に取残された孤島の宗教の妙味が存する状態を私の見聞のまゝに御報告するに止めて置きたいと思ふ。